様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520237
研究課題名（和文）　オースティンを中心とした 18 世紀イギリス小説の医学文化論及びジェンダー論的研究
研究課題名（英文）　Medical Context and Gender Issues in Eighteenth-Century British Novels, Focusing Jane Austen

研究代表者
武井　暁子（TAKEI AKIKO）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：00403634

研究成果の概要（和文）：18 世紀後半から 19 世紀初頭のイギリス小説の重要なテーマであった感受性の概念は神経医学の発達の産物であり、医学知識の一般化と不即不離だった。感受性が広く大衆に受け入れられるにつれて、女性の身体的精神的か弱さは女性らしい感受性や繊細さの証拠とされた。女性自身も、理想の女性像に合わせるべく、自己の弱さを演出し、ヒステリー、拒食症、さらに漠然とした身体の不快が女性特有の病気や症状として蔓延した。これらのことを当時の医学資料を参照し、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The concept of sensibility was a popular theme of mid-eighteenth-century and early-nineteenth-century British novels. I demonstrated that the popularization of sensibility was largely due to the development of neurology and the spread of medical knowledge among well-educated lay public. As the concept of sensibility was accepted, women’s physical frailty and lack of decision-making ability were the signs of womanly sensibility and delicacy. Women dared to feign to be ill to accommodate to what was deemed model women. As a result, hysteria, anorexia nervosa, and other ailments were regarded as symptoms peculiar to delicate women. These are verified based upon medical texts published from the mid-eighteenth to early-nineteenth centuries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：18 世紀イギリス、医学史、ジェンダー

１．研究開始当初の背景

ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817、以下 JA と略記）と医学の関連を論じた研究書は John Wiltshire, *Jane Austen and the Body: ‘The Picture of Health’* (1992) と Anita G. Gorman, *The Body in*

Illness and Health: Themes and Images in Jane Austen (1993)の2件であった。その他は個々の作品に登場する病について断片的に論じた論文が数件であり、JA研究において看過されてきた領域である。このような状況にいたった原因はJAが18世紀イングランドの中流階級出身の女性であり、医学や身体についてごく控えめな描写しかない、というイメージに災いされたこと、さらに18世紀に出版された医学書を読む労を取る研究者が少なかったためである。

JAと病および医学について論じた代表的論文はJ. R. Watson, "Mr. Perry's Patients: A View of *Emma*" (1970), Tony Tanner, "Secrecy and Sickness: '*Sense and Sensibility*'" (1986), Toby A. Olshin, "Jane Austen: A Romantic, Systematic, or Realistic Approach to Medicine?" (1981)等がある。

Watsonの論文はJA作品における健康の隠喩的役割について明らかにした初期のものであり、登場人物の病に対する反応と道徳性との相関関係について論じている。

Tannerは18世紀に流行した感受性の概念と病との関連を明らかにし、女性の病は社会に対する不快感と反抗の表象であると示唆した。

OlshinはJAの医学知識と当時の医学水準そのものを論考の対象とし、当時の医学水準は低く、たいていの病気に対して即効性のある治療手段がなかったこと、JAの病に関する描写が正確なことを指摘した。以上の先行研究により、18世紀の感受性の流行と神経医学の発達、JA作品における心気症やヒステリーが持つ社会的背景が研究対象としてクローズアップされた。

Wiltshireは、*Sense and Sensibility*, *Mansfield Park*, *Emma*, *Persuasion*, *Sanditon*を論考の対象にして、作中の涙、気絶、赤面などの身体の動きが持つ象徴性と当時の医学の関連についてフェミニズム理論も援用して考察する。しかしながら、参照されている医学資料が少なく、断片的な引用が多いため、JAと当時の医学文化的背景の関連性を十分に論じたものとはいえない。さらに、*Northanger Abbey*と*Pride and Prejudice*に関して独立した章がないのも欠点といえよう。

Gormanは習作を含めてJAのすべての作品を論じており、病と健康の隠喩的な役割を明らかにし、病と健康が登場人物の性格設定に重要な役割を果たすこと、プロットを進める上でたくみに使われていることを示唆する。だが、Wiltshireと同様当時の医学資料の使い方は断片的で、医学的コンテクストを無視したことによる初歩的な間違いがある。

２．研究の目的

本研究では、JAおよび他の18世紀イギリス小説における病と健康に関する言説を、当時の一次資料および社会文化的コンテクストに依拠して分析することによって、当時小説のテーマとして流行した感受性("sensibility")の概念は神経医学の発達の産物であり、医学知識の一般化と不即不離であること、感受性の美名の下で、女性は身体的精神的にか弱く依存するべき性であるという認識が定着し、女性自身がそれを受け入れ、ヒステリー、拒食症、さらに漠然とした身体の不快が女性特有の病気や症状として蔓延したことを明らかにする。

JAの作品に重点を置く第1の理由は、JAが習作時代から一環して、感受性を女性にとって不可欠な美徳とみなす流行に批判的であったことがよく知られているからである。例えば、気絶、食欲不振、ヒステリーなどの身体症状は徹底的に風刺されているし、女性が社会的通念に影響されてそのような症状を起こすように自らを追い込む様子も描かれている。後期作品では、習作および初期作品に見られたような明るい風刺は影をひそめ、女性の身体的不快は家父長制社会で彼女たちが受ける抑圧に対する不適応であるということが示唆されるのであるが、感受性の流行に対して、批判的な立場を明確にした18世紀イギリス小説家はJAがおそらく初めて且つ唯一である。これはJAとリチャードソン，フィールディング，バーニー，エッジワース，ラドクリフ等が決定的に違う点であり、比較研究の一助になる。

第2の理由としては、JAと感受性の流行については、Tannerを初めとしてたびたび論じられてきたが、ユーモア、風刺といった小説技法、もしくは他の作家との比較研究といった文学史の点から論じられることがほとんどで、当時の精神医学との関連で論じられることはなかった。だが、医学史家W. F. Bynumが指摘するように一般大衆が神経の存在を知り神経症を訴えることが可能になったのは神経医学が格段に発達した18世紀以降である("The Nervous Patient in Eighteenth- and Nineteenth-Century Britain: The Psychiatric Origins of British Neurology" [1985])。"elasticity," "spirit"などの単語はJAのみならず18世紀イギリス小説で使われているが、元々は医学用語だった。"sensibility"の概念はスイスの科学者Albrecht von Haller(1708-77)が人体組織を神経の働きに基づいて分類した用語であり、それが、医学知識の普及によって一般大衆が人格や気質を表すのに使い始め、流行した言葉である。ゆえに、医学の発達と知識の普及は感受性を論じる上で不可欠であり、JAの小説を18世紀イギリスの社会分化風土コンテ

クストで再読することが可能であり、ひいては 18 世紀小説研究に従来のジャンルを越えた新しい方向性を与える。

３．研究の方法

本研究の手法の特徴は 18 世紀の医学テキストと中流階級子女を対象に書かれた行動教本、および現代の医学史家の研究を多読、及びフェミニズム批評の援用することにある。すなわち、オースティンの作品を 18 世紀と 19 世紀初頭の広いスパンに置き、文学、医学、文化の分野から複合的に読み直すというものであって、国内および海外でも前例のないものである。研究代表者がこれまでに遂行してきたイギリス小説と文化研究及び医学史の研究がこのようなジャンルを超越した研究の基礎になっている。

(1)2007 年度

①JA 作品における病、感受性、及び医学の相互関係の再確認とそのデータの抽出・整理

習作から *Sanditon* にいたるまで JA の全テクストを精査し、上にあげた身体症状の具体例を抽出して、電子データとして整理した。このうち、*Mansfield Park* については、過去の研究において、当時の医学資料を用いて、家父長制社会が要求する女性らしさが身体の弱体化を必然的に伴うものであり、そのような社会体制に対する JA の批判を詳細に論じたので、2005 年度ではその他の小説についての分析が主たる作業になった。

②18 世紀医学および現代医学史資料の収集と整理

本研究の基礎を一層強固にするためには、女性の身体的器質的虚弱さについて著述した 18 世紀の医学テクスト、さらに現代医学史の観点からの研究書および論文等を収集整理する必要があった。

これらの資料は国内で入手不可能で、電子化されていない。よって、9 月 15 日から 25 日まで大英図書館等で資料収集と調査を行った。

(2)2008 年度

①ジェンダーと医学に関する諸理論の整理

ジェンダーは、18 世紀イギリス小説、特に女性を論じる上で考察することは不可欠であり、理論も多岐にわたっている。そこで、本研究に必要な 18 世紀医学のディスコースをジェンダーの観点から分析し、医学史の専門家以外にもわかるように平易に論じた研究書を数冊精読した。

②18 世紀医学および現代医学史資料の収集と整理

2007 年度に引き続き、18 世紀の医学テクスト、さらに現代医学史の観点からの研究書および論文等を収集整理する必要があった。よって、8 月 26 日から 9 月 13 日まで大英図書館等で資料収集と調査を行った。

(3)2009 年度

①最終年度に当たる 2009 年度は、2007-08 年度の研究のまとめを中心に行った。具体的には、これまでに行ったオースティンの作品と他の 18 世紀イギリス小説で取り扱われている感受性のテーマを 18 世紀の医学及び社会文化風土との相関関係を明確にし、オースティンの 18 世紀イギリス小説における位置づけを確定し、さらに、ジェンダー論の研究によって得られた現代的な考察による依拠したテクスト解読およびその補強を行った。ただし、本研究は過去のオースティン研究および医学史の研究による成果を基礎として行われるものであるため、必然的に過去 7-8 年分の研究全体のまとめを行うことにもなった。

②2008 年度に引き続き、18 世紀の医学テクスト、さらに現代医学史の観点からの研究書および論文等を収集整理する必要があった。よって、8 月 25 日から 9 月 11 日まで大英図書館等で資料収集と調査を行った。

４．研究成果

(1)2007 年度

①オースティンの全テクストを精査し、上にあげた身体症状の具体例を抽出して、電子データとして整理した結果、女性の食について着目するにいたった。

オースティンの 10 代の頃の習作では、若い女性の大食が実にあっけらかんと書かれており、女性の旺盛な食欲は単に生理的欲求というだけでなく、当時女性の美徳として挙げられた控えめ、しとやかさといった女性の美徳への反抗の表れとして機能する。

ところが、オースティンが成人になってから執筆された作品では、小食を誇らしげにアピールする女性が登場し、「食べてはいけない」という社会からの抑圧が、女性の意識の中で「食べない」という自発的行為として置換えられ、「食べられない」拒食症状を引き起こすメカニズムが描かれている。

この着想を得た後、拒食症について初めて明確な記述をしたといわれるウィリアム・ガルの論文(1873 年刊行)、カレン・カーペンターの拒食症の分析をし、JA のテクストを再読したその結果により、現代の拒食症に通じる問題点を明らかにすることができた。

②次に、『サンディトン』の主題である、海岸保養地の開発について、JA の主要作品が執筆された 1810 年代の後半の南東イングラン

ド海岸地帯の地図、当時の地主の特質を分析したミンゲイなどの研究書を読み、漠然とした不安や身体的不快症状を訴えることが流行になり、それを治療しつつ娯楽を提供する海岸保養地の誕生の必然性を精査し、病が商品化される過程を明らかにした。成果の一部を日本英文学会と日本オースティン協会の大会で発表した。

本発表において、保養地への旅行が中産階級の富の蓄積と密接に関連していることを明確にし、JA の時代の中産階級のメンタリティの変化を明らかにし、「変動の時代」といわれる JA の時代の特質を論じることができた。

(2)2008 年度

①12 月、研究代表者が共著者の１人となった、横山茂雄編、『危ない食卓――十九世紀イギリス文学にみる食と毒』(新人物往来社、平成 20 年 12 月)に刊行された。

代表者は、「第２部　イギリス文学にみる〈危ない食卓〉」の「食べてはいけない、食べない、食べられない―ジェイン・オースティンの拒食症患者を診断する」(pp.136-68)、及び「第３部　翻訳資料」の「神経性食欲不振症(ヒステリー性消化不良、ヒステリー性食欲不振症)　ウィリアム・ウィズィ・ガル」(pp.259-72)の執筆を担当した。

本書において、これまで、断片的に論じられてきた、JA の女性たちの間に発生する拒食症は、女性たちが、因習的な女性の美徳に自らを適合させようとした結果生じるものであること、その背景には、女性たちが自己決定権を行使できない社会状況と他者との相互コミュニケーションの不足があると論じた。拒食症がある一定の社会文化で作られた病であることを、現代的視点も加味して一般読者にも啓蒙できた。ガルの翻訳は本邦初であり、拒食症がどのように一般に認知されたか知る上で意義あるものである。

②18 世紀医学のディスコースをジェンダーの観点から分析した研究書のうち、中でも、Londa Schiebinger, *The Mind Has No Sex? Women in the Origins of Modern Science* (1989), Thomas Laqueur, *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud* (1990) からは多々の示唆を受けた。

前者からは、出産は従来助産婦が執り行うもので、産科は女性が唯一職業人として算入できる領域であったが、18 世紀から、助産婦が大学で医学教育を受けた男性医師に取って変わられつつあり、専門家による医術の独占化が始まったことを知り、下記の国際学会発表応募の際の一助になった。

後者からは、ジェンダーの概念が誕生したのは 18 世紀後半からであり、本来男性と女性の生物的相違は客観的で歴史とは無関係であるのに、経済的、政治的、文化的な背景が相互に関連して、ジェンダーが形成され、その際、アリストテレス、ガレンなどの著作、神経線維の太さ、大脳の大きさ、骨格の違い、などの医学言説が巧みに援用されたことを体系的に知ることができた。

③2009 年 7 月、イギリスで開催される学会”New Directions in Austen Studies”での研究発表に応募し、受諾された。

(3)2009 年度

①ファニー・バーニー、アン・ラドクリフ等の先行作家と比較し、JA 作品が 18 世紀イギリス小説の笑いやユーモアを継承した上、JA の女性は女性の自由が制限された環境においても、苦境を打開する積極性と強さが先行作家の作品よりも強調されていること、女性の現状についての写実的な描写により、19 世紀イギリス小説の特徴であるより真摯で痛烈な社会批判を先取りしていることを明らかにした。また、JA 作品が素人療法から専門家による治療へのシフトを巧みに描いていることが判明した。

②研究成果の一部は、7 月、英国チョートンで開催された学会”New Directions in Austen Studies”において発表を行った。内容は、先に述べた、素人療法から専門家による治療でのシフトについてである。

JA の時代、医者や薬剤師がほとんどいない地方の町村では家庭療法が主流であり、JA の登場人物には他人の健康管理にまで熱心に関わる人物が多いのだが、間違った知識や不器用な手際が多数描かれ、JA が素人療法よりは専門家による治療に賛同していたこと、医者が経済力を増したことにより、社会的地位が向上したことを指摘した。本発表では、従来独立して論じられてきた、JA 作品における素人療法と医者の実像を関連させて、考察することが出来、JA の医学的知識や視点に新たな読みを提供することができた。

発表終了後、原稿に加筆し、編集者の査読、アドバイスにより、JA の時代より前の 1740-50 年代に出版された家庭向きの医学書も参照し、再査読を経て、*Persuasions On-Line* 30 巻 1 号に掲載となった。1 冊の研究書としてまとめるには、残念ながら時間切れになり、今後さらに時間がかかるが、当初の目標であった、研究成果を英語で発表し、国際的な評価を受けることが出来た。

上記に加えて、2010 年 10 月、アメリカ合衆国ポートランドで開催される北米 JA 協会の年次大会の研究発表に応募し、受諾された。内容は *Northanger Abbey* の中心舞台である Bath の温泉保養地としての特性とそこに集

う人間に共通点―嘘つきの深層心理の分析である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①Takei, Akiko(武井　暁子), “Mr Cole is Very Bilious”：The Art of Lay Medicine in Jane Austen’s Characters, *Persuasions On-Line* 30.1, 査読有, 2009, http://www.jasna.org/persuasions/on-line/vol30no1/takei.html

〔学会発表〕（計３件）
①Takei, Akiko(武井　暁子), The Art of Lay Medicine of Jane Austen’s Characters, New Directions in Austen Studies, 事前審査有, 2009.7.11, Chawton House Library, Chawton, UK

②武井　暁子, サンディトンの村おこしビジネス, 日本オースティン協会, 2007.6.30, 明治学院大学

③武井　暁子, “Nobody Could Catch Cold by the Sea”: Jane Austen and the Vogue for Watering Places, 日本英文学会, 事前審査有, 2007.5.20, 慶應義塾大学

〔図書〕（計１件）
①横山茂雄(編)/岩田詫子、大久保譲、小宮彩加、武井暁子、南直人, 新人物往来社,『危ない食卓―十九世紀イギリス文学にみる食と毒』, 2009, 136-168, 259-272

〔その他〕
ホームページ等
http://jglobal.jst.go.jp/detail.php?JGLOBAL_ID=200901040648292937&t=1&d=1&q=5000086104

６．研究組織
(1)研究代表者
武井　暁子（TAKEI AKIKO）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：00403634

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：